

(様式 5)

「秋田大学研究者海外派遣事業」帰国報告書

平成 29 年 10 月 9 日

所属・職名：教育学研究科教授

氏名：原 義彦

派遣期間：平成 29 年 3 月 19 日～平成 29 年 9 月 10 日

派遣研究機関名：英文 Roskilde University

：和文 ロスキレ大学

研究課題：フォルケホイスコーレの評価と学校価値設定プロセスの研究

○ 研究概要（2000 字程度）

1. 本研究の目的と方法

1.1 研究の目的

本研究の目的は、デンマーク発祥の成人教育施設であるフォルケホイスコーレ (Folkehøjskole) の施設評価の実態とその特徴を明らかにすることである。また、施設の評価は、その施設の価値 (værdi) の達成及び実現の状況に基づいて行われるものであることから、各フォルケホイスコーレが目指す価値の類型化とそのプロセスの検討も目的とした。

フォルケホイスコーレは、19 世紀半ば、グルントヴィらの主導により、敗戦によって荒廃した国土の復興と郷土愛の向上などのため、農村青年の教育を目的として設立された教育施設である。2017 年 3 月現在、デンマークには 68 のフォルケホイスコーレがあり、18 歳以上であれば、性別、年齢、国籍を問わず無試験で入学が可能となっている。

フォルケホイスコーレは 2003 年の法律改正により、その学校が目指す価値を自身のウェブサイトで公開することと、その価値に基づいた評価を少なくとも 2 年に一度行うことが義務づけられた。この規程は、2014 年に発効のフォルケホイスコーレ法にも引き継がれている。

そこで、本研究では、主として次の 2 つの研究課題を設定した。

- ① フォルケホイスコーレの学校価値にみられる内容的な特徴を明らかにし、その類型化を行う。
- ② フォルケホイスコーレにおける自己評価の実態とその特徴を明らかにする。

1.2 研究方法

これらの研究課題を解明するため、2 つの調査を行った (表 1)。調査 1 は学校価値の分析のための調査で、68 校すべてのフォルケホイスコーレの学校価値に関する資料収集を、主としてウェブサイトを通じて行った。また、調査 2 はフォルケホイスコーレの自己評価の実態を明

(様式 5)

らかにするための調査で、全 68 校のうち 35 校を訪問し、学校長等へのインタビューを行った。

表 1 調査方法

	調査 1	調査 2
目的	各フォルケホイスコーレの学校価値の分析と類型化 (主に研究課題①のため)	フォルケホイスコーレの自己評価の実態と特徴の解明 (主に研究課題②のため)
方法	主として各フォルケホイスコーレ学ウェブサイトを通じた収集、および学校訪問を通じた収集	フォルケホイスコーレ訪問による学校長等へのインタビュー
調査時期	平成 29 年 3~6 月	平成 29 年 4 月~8 月
調査内容	学校価値についての記述及び内容	学校価値とその設定方法、学校価値の具体的実践例、自己評価の方法等
調査校数	全 68 校	35 校 (全 68 校中)

2 結果

2.1 学校価値にみられる特徴とその類型化

各フォルケホイスコーレの学校価値の記述の形式は多様であるが、それらの内容を分析するため、まず、共通して用いられている語の出現状況を分析した。その結果、上位 5 位までの語をみると、最も多くの学校の学校価値にみられた語は「生 (または、生きること)」(68 校中 54 校)であった。次いで「共同体」(同 37 校)、「責任」(同 35 校)、「民主主義 (または、民主的)」(同 35 校)、「尊敬」(同 26 校)であった。

さらに、学校価値の記述を、その内容と具体性のレベルから、4 つのカテゴリーに分類した (表 2)。その結果、類型別にみた学校数では、学校価値の記述が最も理念的といえる「1 学校の教育理念、教育観あるいは宗教観の記述を中心とした内容」の学校は 25 校であった。また、

表 2 学校価値の類型

学校価値の内容と具体性のレベルによる類型	学校数 (比率)
1 学校の教育理念、教育観あるいは宗教観の記述を中心とした内容	25 (36.8%)
2 学校の教育方針、教育的提供の内容あるいは教育環境の記述を中心とした内容	30 (44.1%)
3 学校の教育方針 (期待する学生の資質能力を含む) の記述を中心とした内容	9 (13.2%)
4 学校の教育方針 (地域社会への貢献を含む) の記述を中心とした内容	4 (5.9%)

(様式 5)

教育方針とともに、それを具現化するための教育的提供（授業、講座等）や教育的環境（教室環境、居住環境等）にかかわる内容の「2 学校の教育方針、教育的提供の内容あるいは教育環境の記述を中心とした内容」は 30 校あり、これが全体の中では最も多いことが明らかになった。

2.2 学校価値に基づく自己評価にみられる特徴

全 68 校中、35 校において自己評価の実施状況等についてインタビューを行った。その結果、各学校において自己評価は行なわれているが、その方法は学校によって異なっており、多様である。その中で、ほぼすべての学校の自己評価で採られている自己評価の方法は、討論や対話である。また、質問紙による方法も多くの学校でみられたが、これらを含め、調査を通じて得られた自己評価の方法を分類すると次の 4 つになる。

1. 学生への質問紙による方法
2. 教員から学生への口頭での質問による方法
3. 学生との討議、対話による方法
4. 教員とその他のすべての職員の討議による方法

各学校では、これらのすべて、あるいは一部の方法を組み合わせて自己評価が行なわれている。

2.3 考察

まず、フォルケホイスコーレの学校価値は、全般的な傾向として、いくつかのキーワードが使われながら、学校の教育理念、教育方針として設定されている。また、その内容の具体性のレベルには幅があり、4 つの類型に分類することができた。このような具体性のレベルによる類型に分けられる理由の一つは、各学校における「学校価値」の捉え方に幅があることであり、それを学校の理念として捉えたり、目的、あるいは目標として捉えている学校がある。このような学校価値の捉え方と、それに基づく価値設定プロセスの違いによって、自己評価の方法にも差異が生じてくると考えられる。

自己評価に関しては、質問紙による方法は、その結果を用いて学校価値の具現化や達成状況を定量的に示すには効果的である。また、多くの学校で行なわれている学生との討論、対話、および教職員による討論という方法は、フォルケホイスコーレの教育が歴史的にも有する特徴的な方法といえるが、評価結果の明示という点からすると、討論や対話の結果を記述して示すことは簡単ではない。重要なことは、そこでどのようなことが、どのように討論され、対話がなされたかである。

さらに、学校価値とそれに基づく自己評価との関連でみると、ミッション系のフォルケホイスコーレは地域における宗教的貢献が主要な学校価値であり、学校や学生の活動の自己評価は行いやすいと考えられる。

なお、これらの研究成果の一部は、次のとおり発表した。

(様式 5)

Yoshihiko Hara “A study on school value in Danish folk high school and its classification”, The 45th Congress of the Nordic Educational Research Association, 2017 (Aalborg University, Copenhagen)

今後は、ここで類型として示した自己評価の方法を詳細に分析するとともに、学校価値の類型との関連の検討を通して、その特徴を明らかにしていくことを考えている。また、まだ訪問調査ができなかった学校については、今後、機会を作って現地における調査を続けていきたいと考えている。

○研究期間全般にわたる感想

まず、このたび、研究者海外派遣事業の貴重な機会を与えていただいた本学の関係者の皆様には、この場をお借りして、深く御礼を申し上げます。ここでは、研究期間全般に関わって、派遣先研究機関での研究活動と交流、現地におけるフィールド調査、その他にわけて、その一端を簡単に振り返ってみたいと思います。

①派遣先研究機関（ロスキレ大学）での研究活動と交流

派遣先のロスキレ大学においては、受け入れの世話人教員の Henning Salling Olsen 教授や関係する教員の方々からは懇切丁寧なご指導、ご助言をいただいた。上記の調査研究の遂行にかかわるアドバイスはもちろんのこと、デンマークの成人教育や教育一般、社会情勢等について、様々なご示唆をいただくことができた。このほか、論文の指導会や学位論文公開口頭試問、Phd Summer School など、学内で行われた研究行事にも参加の機会をいただき、ロスキレ大学やデンマーク、さらにはヨーロッパにおける広汎かつ深淵な成人教育研究に触れることができた。

加えて、大学では快適な研究室を用意していただいた。また、図書館利用、印刷機の利用など研究環境にも多大なご配慮をいただいたことにより、滞在期間の研究を極めて円滑に進めることができた。ロスキレ大学の関係者の皆様には心より感謝を申し上げます。



世話人教員との研究ミーティング（ロスキレ大学）

②現地におけるフィールド調査

調査研究に関しては、今回の研究期間での調査対象はデンマーク国内に点在するフォルケホイスコレであり、それらの訪問調査を通じて、校長先生ほか、関係者の聞き取り調査を行う

(様式 5)

ことが実質的に主要な研究活動であった。現地到着後の平成 29 年 3 月より各校への訪問調査の依頼を開始し、了解が得られた学校から訪問することになった。フォルケホイスコーレは伝統的に農村地域や都市部であっても郊外に設置されているため、1 日でも訪問はせいぜい 2 校が限界で、泊まりで出かけることもしばしばであった。研究期間終了間近の 8 月までに、全体の半数を超える 35 校を訪問することができてほっとする一面があったが、半数弱のフォルケホイスコーレが未踏のままになったことは残念な思いでもある。



テスタロップホイスコーレの学生
(昼休みのひととき)

訪問した学校の中には、その後、学校に滞在(宿泊)しながらの調査に了解をいただいた施設が 2 校あった。1 つはオレロップ体操アカデミー (Gymnastikhøjskolen i Ollerup) で、もう 1 つはバーナップホイスコーレ (Brenderup Højskole) である。オレロップ体操アカデミーでは、長期コースの学生のみなさんと生活を共にし、入学の目的や日々の学校での活動についての意識、修了後の進路などを伺うことができた。バーナップホイスコーレでは夏期に実施される一般向けの短期コース(一週間)に一受講者として参加し、デンマーク人の成人受講者との活動を通じて交流を深めつつ、学校の内側から学校価値の実現過程を観察することができた。

このような国内の各地の学校を継続的に訪問する調査や、じっくりと時間をかけて体験と観察を通じて調査をする機会は、本事業のような長期間の滞在でなければ成し得なかったことと考えている。

③その他

本年は日本デンマーク外交関係樹立 150 周年の記念の年にあたり、首都コペンハーゲンを中心に、日本の文化、芸術、産業等にかかわる数々の催しが行なわれていた。それらへの参加を通して、両国の長い交流の歴史を知るとともに、これからの友好関係のさらなる発展を期する機会ともなった。図らずもこのような年にデンマークに滞在し、各種の催しを見聞きし、理解を深めることができたことは、この上ない喜びである。



多くの人で賑わうサクラ・フェスティバル
(コペンハーゲン)

最後に、本事業で得られた研究成果、また、現地で得られた研究者や関係施設、機関等のネットワークを、これからの本学での教育、研究、国際交流の場で積極的に生かしていきたいと考えています。